

#### User Profile



#### 株式会社ナガノトマト

本社所在地：〒399-8712

長野県松本市村井町南 3-15-37

設立：1957年

資本金：3億1000万円

従業員数：112名

事業内容：トマト製品・なめ苺製品・調理製品・ジュース等の製造・販売

URL：<http://www.naganotomato.jp/>



株式会社ナガノトマト  
管理部

増田 一秀 氏



信州生まれの  
安心・上質。

## 株式会社ナガノトマト

### ITが支える「ものづくりの精神」 システム連携ツールでブラックボックス化を解消

#### 課題

- 基幹システム内に連携されていないデータがバラバラに存在
- ブラックボックス化したExcelマクロによる非効率なデータ運用
- システム移行作業のスピードアップ・効率化

#### 効果

- タイムリーなデータ連携によって迅速な業務処理を実現
- データ連携をブラックボックスにしない容易なメンテナンス性を実現
- 専門性の高い研修を受けることなく短期間で導入  
SIコストを抑えたデータ移行を実現

地元・長野県産のトマトやえのき苺を使った、トマトケチャップやなめ苺茶漬などの農産加工品を生産している株式会社ナガノトマト。同社のなめ苺製品は、2006年から2009年まで連続してモンドセレクションの金賞・最高金賞を受賞。また、原料からこだわり抜いて作られたトマトケチャップは、マクドナルドの世界基準にも選ばれている。

#### 導入の経緯

創業55年を迎えてなお、意欲的に新製品をうみだし続けている同社。そんな同社の課題となっていたのが、多岐に渡るシステムの連携だった。

「コンピュータを導入したのは二十年前。当時はオフィスコンピュータで、財務主体のシステムからのスタートでした。その後、生産・流通と順次導入したために、基幹システムのデータはバラバラ。オープン化に伴ってシステムの連携が必要となりました」

当初はベンダーに連携ツールの制作を依頼していたという同社。しかし、会社の成長に応じて日々増えていく業務の中では対応が間に合わず、増田氏の前任者がExcelとAccessの連携をさせるためにマクロを作成した。「ところが、マクロを作成した前任者が退職後、マクロを解析することができず、メンテナンスすら困難な状況に陥ってしまいました」

そこで、ブラックボックス化した膨大な数のマクロに代わるデータ連携ツールとして、JBCCが提案したのがData Anywareだった。Data Anywareは、開発・運営体制の異なるシステムデータの連携・加工処理を容易に一元管理できるデータ連携ソリューションだ。

#### 導入のポイント

新たなシステム連携ツールを導入するにあたって、同社が重要視していたのは、短期間でシステム移行作業を完了させることだった。当時、倉庫管理を委託する業者の変更を決めていた同社はそれと同時に、これまで紙ベースで行っていた情報のEDI化もスタートさせたいと考えていた。

「管理業者の変更は二ヶ月後。それまでにはEDI化したデータとの連携も完了させなくてはなりませんでした。」そんな限られた時間の中、専門性の高い研修を受ける必要がなく、ある程度の知識があれば比較的容易に使うことができるData Anywareは要件にぴたりとマッチしたと言う。「通常であれば専門的な知識が必要となる、オラクルのデータベースからのデータ抽出も容易にできるなど、

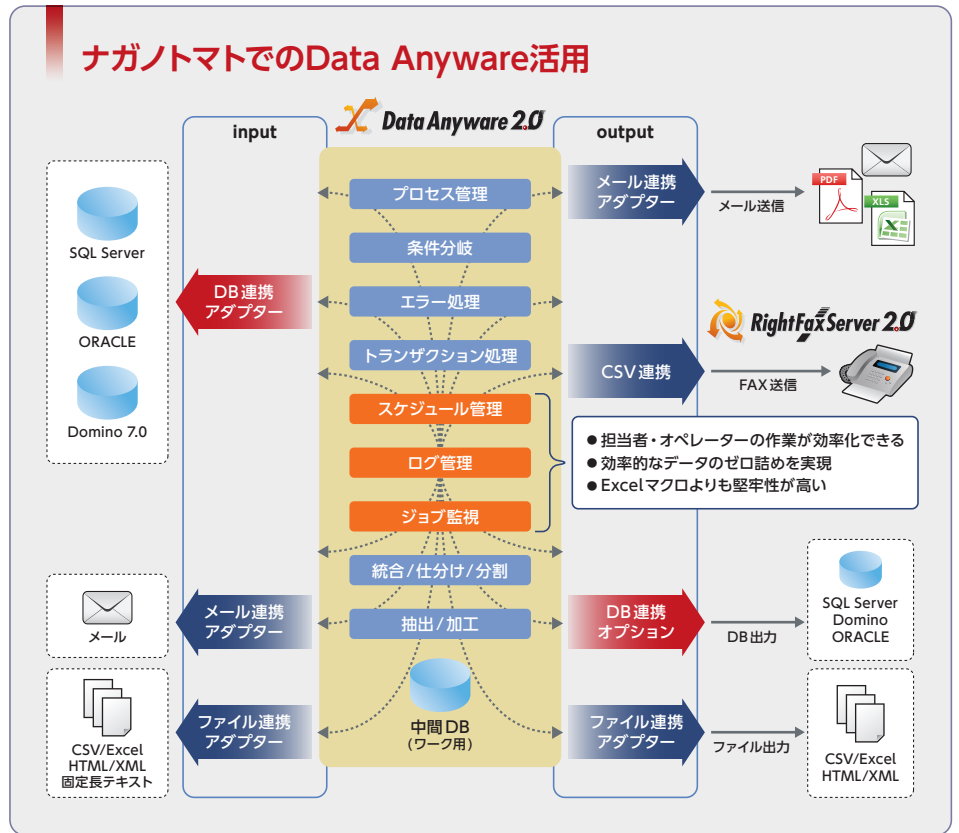
期待していた以上の使い勝手のよさに、導入から一ヶ月後には当たり前ものとして使っていたほどです」

容易なオペレーティングの一例として、Data Anywareではアイコンをベースにしたフローチャートを用いて、処理内容の可視化を実現している。どのようなシステム連携が必要となるのか、目的が明確であれば、直感的にシステムを構築することができる。外部のベンダーに発注する必要もなく、作業員を選ばないことから、システム構築の短期間化が期待できるのだ。また、フローチャートにはコメントを書き込むことができる。それをマニュアルとして用いることができるのも、Data Anywareの特徴だ。

### 導入効果

このように、システムの構造をグラフィックで把握し、変更点をテキストで書き残しておけば、後に別の担当者が見たときにも、容易に解析することができる。「ノウハウをブラックボックス化することなく、蓄積・継承できるようになったことで、当社のIT課題の根本的な部分が解消できました。とても満足しています」と増田氏は語る。「また、倉庫管理業者とのやり取りをEDI化するにあたって、相手から届くデータをリアルタイムで現場に反映することができれば、より迅速な業務処理が期待できると考えていました。その点もData Anywareを使って、メールやFAX、PDFなどのアウトプットと連携することで、EDIデータの到着をメールで自動通知できるようになりました。システム管理者の負担を減らすだけでなく、そのデータを使う現場がタイムリーに動くことができるツールだと思います」

さらに、Data Anywareの導入後、想定外のメリットもあったようだ。同社では、基幹システムが財務・生産・流通・営業・お客様の声・Lotus Notesの6つに分かれている。すべてをひとつに統合せず、あえて連携ツールを介しているのには、ハードの入れ替え時期をずらすことで、IT機器に関する支出を平



均化する狙いがあるという。しかし、ハードを入れ替える際には、ほかの基幹システムとの連携を維持するために、新旧システムの間で生じるズレを修正しなければならない。そのためにデータ移行をベンダーに依頼する必要があり、高額な移行費用がネックになっていた。従来のデータ移行では、最初にデータをすべて解析し、移行のためのプログラムをゼロから構築しなければならなかった。さらに移行後もエラーが生じていないか、チェックが必要となる。ところが、Data Anywareを用いてシステム管理者自身が移行作業を行えば、システム構造の見直しやプログラムの変更は不要だ。さらに移行後もエラーが生じれば、一早く気付くこともできる。「Data Anyware導入後はじめての基幹システムのハード入れ替えでは、ベンダーに依頼するのではなく、自社管理者の手によるデータ移行を試みました。データ移行はディスプレイに表示

されたアイコン同士を一本の線でつなぐだけ。これまでよりも格段に早く、外注費用をかけずにデータを移行することに成功しました」

### 今後の展望

このように、これまでのデータ移行で生じていた費用と手間を大幅に省くことができたのは、大きなメリットだと感じていると増田氏は言う。「今後、企業でのIT活用がますます広がる中で、既存のデータの活用や移行は無視できない課題となるでしょう。当社ではその課題解決のために、Data Anywareを活用していきたいと考えています」

創業当時から「品質」にこだわり続けてきたナガノトマト。同社の「ものづくりの精神」はIT技術に支えられて、これからの時代も遺憾なく発揮されることだろう。